第八章　偏った成長

確かに安倍川餅総理……じゃなかった、安倍川元総理は日本経済を成長させたと自慢しているけれど本当なんだろうか？」

テレビには数々の統計資料やグラフが現れる。

「やめてくれ！」

大家が拒絶反応を示す。山本が静かに頷く。

「結論だけ申し上げます」

「助かった」

大家がフーッと息を吐き出す。

「全体的には成長してません。成長は部分的、いわゆるマダラ成長です」

「マダラ？　どういうことじゃ？」

大家の疑問に答えようと田中が山本に問いかける。

「後退した分野もあると言うこと？　平均したら日本銀行がよく言う『足踏み状態』ってこと？」

足踏みする山本の姿が現れる。

＊

「一律十万円か」

「ただし十八歳未満の子供にだけです」

「じゃあ僕はダメか」

ここで大家がクレームをつける。

「少子化で子供の人口が減っているが、かなりのお金がいるぞ。そんな金がどこにあるのじゃ。借金だらけなのにまた借金するのか」

いつもどおりこの辺になると勝手にテレビの電源が入って山本が現れる。

「この党首のこの歯切れのよい説明を聞いてください」

顔に老人斑をまき散らしているが髪の毛の分量が多くしかも黒に染めているので見ている者に非常に違和感を抱かせる背広姿の男が白い手袋に握られたマイクに向かって熱演する。

「我が党は無責任なことばかり言う野党とは違います。この若者元気給付金一律十万円プレゼント政策にはちゃあ～んとした財源を確保しております。それは何かと言いますと新型コロナウイルス感染拡大で確保していた予算のうち使い残した二十兆円を使います。このうちたったの二兆円を回すだけで若者たちが元気になり日本は明るくなるのです」

すぐさま大家が怒り出す。

「二十兆円も余っていた？　いい加減な予算を組んだ責任を棚上げにしてよくも言えるもんじ

や。あきれて口がふさがらん！」

と言ったまま大家が黙る。田中がテレビから横にいる大家に視線を移すと叫ぶ。

「大丈夫ですか！」

大家の口が大きく開いたままだ。

「ウガウガ……」

よだれが止めどもなくしたたりい落ちる。

「まずい！」

＊

「なぜ十八歳未満への限定給付にしたんだろ。二十兆円も余っているのなら前にもした国民全員幸福十万円給付にすればいいのに。今度はデジタル庁も作ったから即日給付すれば国民は政府を見直すかも知れない」

「そううまくいかないわ。選挙前は与党野党も庶民に心地のいいバラマキ政策や黒字法人や富裕層課税で強きをくじき弱きを助ける政策を強調するけれど、選挙がすめば痴呆症になるの」

「いつものパターンじゃ」

「なのに庶民は選挙に行かないし若者も自分たちの未来を変えようともしない」

田中が大家に食いつく。

「説明は簡単じゃ」

田中は体調が戻った大家を見て安心する。
「田中さんはまだまだ子供じゃのう」
田中は反発するどころか頷く。
「田中さん。弱者や若者のために選挙に出て議員になる気持ちはあるかな」
即座に田中の顔がゆがむ。
「尊敬されるような人格者が政治家にいるかのう？」
「いるわけないでしょ」
ここでテレビに電源が入ると山本が現れる。
「偏見と趣味で徳のあった政治家を紹介します。人数は少ないのでゆっくりと味わってください」
蛇の道は蛇、あるいは朱に交われば赤くなるので、政界に身を置いて潔癖性を維持するのは大変なこと。ましてや「あの政治家は人格者だ」とか「徳がある人だ」とか国民から愛された政治家は数えるしかいない。
「たったの五人？」
「しかもかなり昔の政治家じゃ」
「今の政治家は再選されたら禊（ミソギ）は済んだと大いばりで闊歩します。
何億円もの出所不明なお金を選挙で地元議員にばらまいた国会議員が高級乗用車に盛り込む

映像が流れる。

「今度はこの議員がターゲットです。偏った成長の典型的な実例はどんどん成長する裏金です」

山本が厳しく指弾するが田中は悲しそうに画面から目をそらせる。

「山本さんがいくら頑張っても視聴者は二人しかいない」

第八章　偏った成長